

巻頭言

夢や希望をかなえる研究

研究管理官 久田 卓興

研究には夢や希望が密かに含まれていなければならない。また、それを実現させる強い情熱が必要である。一見学術的に優れて見える研究でも、人の心に響かない研究は本当の良い研究とはいえない。

独立行政法人になって大きく変わったことといえば、研究に明確な目標を設定する必要が生じたことと、その目標の達成度に対する評価を受けるようになったことである。もちろん、もともと目標のない研究はなかったわけであろうから、評価の受け方が変わったというのが正しいのかもしれない。ただし、この目標は外部に向かってははっきり文書で示す必要があり、密かに思っていることなど評価の対象にはならない。そう思って我が研究所の中期目標を改めて読み返してみると、当然かもしれないが問題解決型や対策型の課題が多く、なかなかここから夢を感じ取ることは難しい。

夢と現実とは離れているほど夢らしいが、夢というといつも思い出す雑誌の記事がある。中学生か高校生の頃だから1958年頃のことであろうか。当時はようやくテレビが一般家庭に普及し始めた頃で、私は勉強そっちのけでアマチュア無線に熱中していた。まだ、真空管が全盛の時代である。そんな中でアメリカではIC（集積回路）技術が開発され、これを使ったメガネ式の補聴器が開発されたという記事が写真入りで載っていた。わずらわしいイヤホンも不要とあったが、まさに夢のような話である。その記事には下に4月1日の日付が付されていて、エイプリルフールを連想させる記者の名前があることにしばらく後で気がついた。しかし、この夢だか嘘かかは現在すでにこれに近いものが実現されている。当時の技術者にはおそらくはっきりとした将来像が見えていたのであろう。

我々の研究にはどうしても使命感が先に立ち、目標達成が気にかかるが、ぜひその中に研究者としての夢や希望を入れ込みたいものである。独法の中期目標は5年間ごとに見直されることになっているが、確かな夢や希望を持って、それを5年ごとに1ステップずつ進めていくようなやり方も工夫次第では可能であろう。でなければ研究や研究所が楽しくない。当研究所の運営も最近ようやくいろいろなルールが定着してきたが、一方で新しい方向への転換も必要な、またやれる時期に来ている。

最近、この文のタイトルをラベルに書き込んで、机の前に貼って毎日眺めている。日常の業務に追われている時もこれを見るとハッとさせる効果がある。何年か先、次のキャッチフレーズ“夢や希望をかなえる研究所”が堂々と、さも自慢げに廊下のあちこちに張り出されているような研究所になってほしいものである。これは夢がなく、本当の私の願いである。



[\[巻頭言\]](#) [\[解説シリーズ\]](#) [\[報告\]](#) [\[おしらせ\]](#)

[\[所報トップページへ\]](#)